はならぬ、たゞに人間同士のみではない、有情でも非情でも皆その通りて、降らしたくないのに雨の降ることもあり、吹いては困る時節に風の吹くこともある、

朝夕の飯さへ硬し軟かし
思ふまゝにはならぬ世のなか

て、死ぬるまで日々三度食べる御飯てさへも毎度思ふまゝにばかりなるものてはありませぬ、此世の中の出來事は一から十まで、十から百まて何事でも思ふまゝにのみは行かないものとすれば、若し堪忍することがなかつたならば、事毎に腹を立てねばならぬ、腹を立てることは眞理に背いて居るので、人の本心を失うて居るといふことは前に委しく申した通りてす、すれば人の本心を持ち傳へて人間並の生活をして行くには、如何しても忍耐がなくてはなりませぬ、忍耐は實に處世の眞意義て、人間世界の必須の要件であるといふよりは、寧ろ當然の事實てす、この忍耐がなければ一日も生き活らへて居る

ことは出來ませぬ、この世を娑婆世界即ち堪忍土と名けた意義は實に鮮明てはありませぬか、それゆゑ佛樣は堪忍の德を御示し遊ばされたことは廣大無邊なものてす、中にも◉羅雲忍辱經には「忍ノ明ナルハ日月ニ踰ユ、龍象ノ力ハ盛猛ナリ、而モ之ヲ忍ニ比スレハ萬々一ニダモ如カズ七寶ノ燈ハ凡俗ノ貴ブ所、然モコレ憂ヲ招キ災患ヲ致ス、忍ノ寶ハ終始安キヲ獲、十方ニ布施スレハ大福アリト雖モ、猶忍ノ福ニ如カズ、○忍ヲ懷キ慈ヲ行セバ、世々怨ナク中心恬然トシテ終ニ害毒ナシ、世ニ恃ム所ナキモ、唯忍ノミ恃ムベシ、○忍ヲ安宅ト爲ス、災怪生ゼザレバナリ忍ヲ神鎧ト爲ス、衆兵モ加ハラザレバナリ、忍ヲ大舟ト爲ス、以テ難ヲ渡ルベケレバナリ、忍ヲ良藥ト爲ス能ク衆命ヲ濟ヘバナリ」と御說き遊ばされてありますが、能く審に御演べなされたものてはありませぬか忍を安宅と爲す、忍を神鎧と爲す、忍を大舟と爲す、忍を良藥と爲すとは實にありがたい御諭してある、私共御互に、若しこの堪忍の良藥を不斷に用ゐて居なければ、瞋恚の癪に差し込まれて、平和の生命を

失つてしまひます、若しこの堪忍の大船に乘らなければ、怒り腹立ちの波風に漂はされて、無間の淵に沈みます、若しこの堪忍の神鎧を着て居なければ忽ち疳癪玉に中てられて、修羅の巷に倒れます、若しこの堪忍の安宅に住居して居なければ、何につけてもムラ〳〵と瞋恚の焔に焦されて一時も安心して居ることは出來ませぬ、佛樣は備さに處世の本義を御示し下されてあるではありませぬか◉佛樣が因位に於て忍辱仙人と爲つて山の中に御修行在らせられた時、その國の哥利王が宮中の諸女共と山の中に酒宴を張り、種々の音樂を爲して大いに疲れ、何時の間にか王は其處に睡り込んでしまつた、女共は果實を取りながら段々と山の奥に這入り、忍辱仙人の修行の場所まで行つたが、その德貌に服して皆仙人の前に坐り敎を聞いて居た、其時王は眼が覺めて見れば誰も居ないから處々を探して見ると、皆仙人の前に居たので仙人が女を引き寄せたものと思ひ大いに怒り、汝は何を爲て居るかと尋ねる、イ私は忍耐の修行を致して居ります、ヨシそれならば試みると言ひながら、劍

を抜いて手を切り足を切り兩耳から鼻まで切つたかそれでも忍耐して瞋り給はず、遂に修行の功を積んで正覺を成就遊ばされたのは、忍耐の奥義を示されたる聖訓でありますが、總て何事を爲るにもこの忍耐がなくては、成功するものではありませぬ、古の韓信が淮陰の少年に辱められて、跨下をくゞつてこれを忍び、後には漢王に仕へて楚王となつたことや、張良が下邳の圯上で老人に辱しめられても、それを忍んで履を拾ふ、太公望の兵法の書を得んが爲の高祖の爲に謀を帷幄の中に廻したことなどは、申すまでもなく皆樣の能く御承知のことですが、大事でも小事でも、日々夜々、老人でも小供でも、男も女も、この忍耐がなくては自分々々の職務を盡すことも出來ますまい、近い話が過日◎電話交換局の通信手永倉富子嬢の話に忍耐がなくては、職務が勤まらないといふ談の時、一通り仕事丈は覺えても、折節御機嫌の惡い加入者があつて「何だまだ咄し中か、オイ〳〵餘り長いぢやないか、怠惰て接續ないのだらう」と、こんなお小言を頂きますが、未だ此位なら良い方ですが

甚だしいのは「馬鹿女郎ー間扳奴」などゝ聞苦しいお叱りを受ける事もあります、けれども最初出勤ました時、局長さんから交換手の心得を吳々もお咄しがありて「加入者には必ず丁寧な言葉を用ゐ、假令加入者の言葉が亂暴ても、交換手は假且にも怒つたり、荒い言葉を返すことはならぬ、爾うすると益ー加入者の感情を惡くする上に、當人の品格も下るから、善くこの邊を注意するやう」といふ御諭達が御座いました、これは私共の片時も忘れてはならぬ事で、これさへ堅く服膺れば、何んなことを被仰られても、決して失禮は申されぬ譯です、處が、或日の夕景でした、私の受持つて居る線をお呼びになりますから「何番へ」とお尋ねしますと、加入者は大層お酒に醉つて居られた御樣子です、それ故つい度々お聞き申しましたら、非常な御立腹で、亂暴なことを被仰つたり揶揄つたり爲さるのですよ、マア何と申してよいやら、腹も立つし當惑しまして、理屈の一つもと思ひましたが、イヤ〳〵豫ての御諭達は此處だと氣がつきましたから、自分ながら急に心が晴々として「これは

是非宥めて上げなければ、私の落度ぢやと一生懸命で「何うも誠に相濟みませんでした、電話が大層遠かつたものですから、切望今一遍何番ですか被仰つて見て下さい」と自分でも出來るだけ優しく、丁寧に申上げた積りです、スルト先方でも實際御用があつてお掛けになつたのですから、お氣を取り直したと見え、今度は確正と聞るやうに呼んで下さつたので故障もなく直に接續まして、ホッと息を吐きました、ホントに何をしても堪忍をしなければならないものです云々と談されましたが、天下を經綸するやうな大事でも、日々〳〵左之右之の私事でも忍耐がなくては實際に於て成就するものではありませぬ、昔の武人とか將軍とかいへば、堪忍といふことがなくて、無暗に短慮で腹を立てたものゝやうに思はれる方があるかも知りませぬが、決して然うではない、德川家康公が天下を握られたのは申すまでもなく忍耐の力である、豐臣秀吉公の如きはなか〳〵短慮な處もあつたけれども、天下の權を握ることの出來たのは、能く堪忍して德川家と和睦したからでせう、その前の織田信長

木村重成の忍耐

公の破れたのは取りも直さず忍耐がなかつたからです、一例を擧げると◎その頃勇名を天下に輝かした木村長門守重成です、この人の勇氣のあつたことを知らない方はありますまい、あの木村重成が殿中で茶坊主の山崎三阿彌に鐵扇で眉間に傷をつけられたのを忍んで、後に大阪陣で名譽の戰死をしたやうに、大事を爲す者は小事に瞋らず忍び耐べるものであります◉遺教經に「忍ノ德タルコト持戒恭敬モ及ブ能ハズ、能ク忍ヲ行ズル者ヲ即チ名ケテ有力ノ大人ト爲ス」とかまた◉法句經に「十千ノ敵ニ對シ、一夫ニシテ之レニ勝ツトモ、未ダ自ラ勝チ忍ブノ上ナルニ若カズ」と御示し遊ばされたのはこの道理です、この堪忍こそ、人間處生の本義であつて、取りも直さず佛樣の御心に合ふたる菩薩行と申すべきものであります

第十八座

精進勇猛（上）

精進の說

戰務の神聖なることを自覺せよ

今席は六德行の第四精進勇猛の箇條について御話申す順序であります、この精進といふ語は、一般にたゞ腥氣の物を食はないことを言ふやうになり、食物のことだけに用ゐて、魚肉や鳥獸の肉をつかはないで、椎茸や干瓢、油揚や燒豆腐、蘿蔔胡蘿蔔のやうな、總て菜食にかゝる方の物を精進料理と稱へて、その外に精進といふ語を用ゐるやうなことはないやうですが、實に狹いことになつてしまつたものです、なるほど佛事や弔祭に鳥や獸を殺さずに、潔齋するのも精進の一分には相違ないけれども、今この精進波羅密の法門は、決して恁麼な狹い意味のものではありませぬ、精進とは讀んで字の如く、精しく進むので、正義公道に向つて精しく進み、近くは人道を全うして遠く菩提涅槃の大道に進むのであります、言ひ換へると、御互が己れの職務の神聖な

ることを自覺して、日用光中努力するのです、過去に向つて悔恨せず、未來に希望の光明を認め、現在に活動して居れば、正々堂々、仰いで天に愧ぢず俯して地に愧ぢず、內心更に一點の疚しき所なく、洒々落々、光風霽月、これほど清淨潔白なことはありますまい、魚肉や獸肉を食はないでも、油揚や燒豆腐をしやぶりながら思ひ存分に大酒を飲み、作すべき業務も作さないで亂痴氣騷ぎをするのは、豈夫精進とも言へますまい、全體この精進の大敵は怠惰です、この怠り惰けることを對治しなければ、精進勇猛は出來る筈はありませぬ、罪惡は必ず懈怠放逸の裡に潛んで居るのです、漸々として常に流るゝ水は腐るものではない、滯り留る水の腐るのは理の當然です、それゆゑ御佛は◉正法念處經に「放逸ノ過ハ一切ノ過ノ中ニ於テ最上タリ」とか、また「愚者ハ放逸ヲ樂ミ、常ニ諸ノ苦惱ヲ受ク、若シ放逸ヲ離ルレバ則チ常安樂ヲ得シ一切諸ノ苦惱ハ放逸ヲ根本ト爲ス、是故ニ苦ヲ離レント欲スレバ、應當ニ放逸ヲ捨ッベシ」と御示しになり◉涅槃經には「夫レ放逸ハ是レ衆惡ノ

本ナリ」と戒められてある、向上進趣の氣象を以て、精進勇猛に己れの本分の天職に努めて居りさへすれば、罪惡を造るの暇はない、小人閑居して不善を爲すの語の意義は、實に鮮明なものであります、世の中の人々が、放逸怠惰にして天職を盡さないから、一切の不善諸惡を造り出すのである◎或る裏店に棲んで居る車夫が、夜半人の寢靜まつた頃、唐突に大聲を揚げて夫婦喧嘩を始めて、男は打擲ぐる嗚はヒッ掻く、後には金切聲で人殺し〳〵と叫び出したから、近所隣家の人々も捨てゝも置けないで、皆起きて仲裁に行つて見ると、男は手から顏から爪痕だらけ、女房は額のあたりは瘤々て、腕の自由が利かなくなつたと言つてさめ〴〵と泣いて居る、座邊は蒲團を引き裂いてあるやら、諸道具を蹴散らかして縱橫に狼籍され、出齒庖丁までも取り出してある、近處の人も餘りのことに驚いて、一體全體今夜の始末は底事であるか、兎も角も一通り理由を談して聞かせよと言へば、その男はさも腹立た し氣に聲を顫はしながら、まあ皆樣能く聞いて下さい、今日は俺も何だか少

し大儀だから、朝から仕事にも出ないて、今夜も早くから一杯飲つて寐込んだのてすよ、處て嚊と寐なから話して居る間に、俺が何でも男一疋に生れて來た思ひ出に、身にはダラリと絹布ぐるみの着流して、切めて五六人の藝妓を引き連れ、些と遠方の名所古蹟でも見物して廻りたいといへば、この女郎は妾は綾や錦を褻衣にして、鯛の吸物鮪の刺身、馬肉牛肉鬪鷄の肉、偶には西洋料理も食べて見たいなんかんと、餘りの我儘をぬかすから、俺等も默つちやあ居られない、何を贅澤言つてるんだい、手前のやうな巨い口では、御馳走は幾等でも食はれもせうが、綾や錦が泣くだらうと言ると、女郎奴負けぬ氣になつて、何ですつて御前さんは、車夫のことだから、脚は強いで幾等でも遠方へは見物に行けもせうが、そんなデコボコのヒヨツトコのシヤツツラで、絹布づくめが聞いて呆れるよッとぬかすものですから、癪に障つて迚ても堪忍が仕切れないのでポカリと一つ女郎の横ッ面を撲ると無性に搔きついて來るから、餘儀なく腕を捩ぢ上げて、出齒庖丁を以て威しつけたのです

と陳べた、スルトその隣家の人が問ひ懸けて、さうかそれはよくないことであつた、が併し御前達は、さう言つては濟ないが餘り富裕な生活でもないではないか、漸くその日〳〵の糊口さへ仕兼ねて居るやうなことで、しかも毎日怠惰てばかり居るやうだが、全體その藝妓を召んだり、綾や錦を買ふお金は何處にあるのだと質すと、車夫先生頭を搔きながら、さあそのお金は、實は今夜嚊と寢物語に、俺等はこのやうに貧乏神に取りつかれて、年が年中苦んでばかり居るが、若し何時か途で誰れかの遺失した金の百兩も拾つたらばその金を以て如何な事をして樂むかと言ひ出して、その金があれば俺はかうすると言へば、嚊はどうすると言ひ、それが根原で如斯な大喧嘩になつたのですと夫婦喧嘩の理由を聞いて、仲裁の人等は餘りに馬鹿々々しくて物も言へず、冗談ぢやあない人を馬鹿にッと、互に顏見合はして吹き出したと言ふ話があります、世間には如斯な夢を見て居る者が、如何に夥しいか知れませぬ、たゞ徒らに空想にのみ耽つて、着實の精進でなければ何の所詮もありま

阿雷兒の精進

すまい、九仞の功を一簣に缺くといふことがありますが、九分九厘まで其事を爲して居て、今一分といふ所に至つて、忽ち掌を反すやうな運命に出遇ふこともありますけれども、その大切な時に兎角懈怠の念に誘はれるものです。が、その懈怠を對治するのが精進です◎彼の阿雷兒が佛國革命史を著した時苦心慘憺の結果に脫稿した上卷の草稿を、友人の彌兒に寄示て意見を徵うとした時、彌兒はその草稿を讀みながら眠つて、少しく紙が紊れて居た、スルト家の家婢が朝起きて、火を燃すのに、その大切な草稿を反古ぢやと思ひ誤つて、殘らず燒き盡してしまつた、後でそのことを知つた彌兒は眞ッ蒼になつて心配したが追ッかない、止むなくそれを阿雷兒に打ち明けると、繫石に阿雷兒も、多年肝血を絞つて稿を脫した革命史が、たゞ一片の灰となつたのですから、茫然として暫くは爲す所も知らなかつたそうですが、こゝて平凡な人ならば大抵挫折する所ですけれども、阿雷兒は更に勇氣を鼓して、再び筆を操り、遂に佛國革命史を大成したのです、恐くこの再度の勇氣は起され

懈怠は衆行の累

明詮法師

ますまい、これ等は眞の精進と申すべきものです、何事をしましても中途にして廢したのては、何の役にも立ちませぬ、孟軻の母がその子の中途に學を廢することを戒めて錦を截つたり、樂羊子の母が絹を斷ち截つて、我が子を誡めたのも皆同じ心です、懈怠放逸を戒められたものに相違ありませぬ、御佛は實際について深く懈怠をお戒め遊ばされて◉菩薩本行經に「夫レ懈怠ハ衆行ノ累ナリ、家ニアリ懈怠レバ衣食供セズ、產業擧ラズ、出家懈怠レバ、生死ノ苦ヲ出離スルコト能ハズ、一切ノ衆事ハ、皆精進ニ依テ興起スルコトヲ得」と仰せられました、家に在りて懈怠れば、衣食にも困り、產業も出來ないことは申すまでもない、出家の者も懈怠れば、生死の流を截ち切つて、涅槃安樂の岸に到ることは出來ませぬ◎釋の明詮法師が歲が僅に十歲の時、父母の家を離れて元興寺に入つて、性相の學問をして居られたが、性質が至つて愚鈍で、忽ちに退屈を生じて、到底辛抱は出來ぬと思ひ定め、或日寺を逃げ出して他處へ行かうとした時、生憎雨が降り出したものであるから、殿陛

の陰に憩うて、簷溜が石の上に落ちるのを、見るともなく見ぬともなく見て居ると、柔かなる水の力で、硬い石に穴をあけて居るのを見て、これは正しく積年の功である、自分が學問の途中で退屈の起るのは、未だ精進が足らないのであつた、努めて廢しさへしなければ、何事をも成就するといふことを自覺して、直に寺に歸り勤め勵んで學問を捨てず、貞觀年中に僧都にまで任ぜられたのであります、この精進勇猛の大敵は、放逸懈怠でありますから、先づ第一に懈怠を懈脫することを勤めねばなりませぬ

精進勇猛（下）

前に申した通り、懈怠の煩惱を解脫して、放逸根性がなくなり、確固不動の信念に住して云爲けば、それが直に精進勇猛の法門であります、總じて世の中に別段大事といふ事柄はない大事とは、結局小事を積み重ねたまでのものである、大仕事をしたといひ、大成功をしたと言つても、始めから大仕事や

小事を積んで大事となる

愚人三重の樓を作る

速成長養の樂

大成功といふやうな、恁麼な物柄や事柄があるのではない、小仕事を積んで大仕事となり小成功を重ねて大成功となつたのである、人間でも、始めから大人の人はないので、赤子の生長したのを大人といふのでせう、如何に御釋迦樣でも孔子樣でも始めから大人でなかつたことは申すまでもないこと、雲に聳ゆる百千尺の大木も、その始めは二葉の嫩芽で、蓬草の裡に困められ、牛羊の群に蹂躪られ、霜雪に耐へ炎熱を凌ぎ、幾春秋の後に漸く棟梁の材となることが出來るのでせう、小事を等閑にせず、諄々乎として菩提の大道に向つて努力して行かなければ、精進とは申されませぬ、百喩經に引かれてある話の◎愚なる一人の金滿家が三重の樓を造るのに大工が下の方から組み立てゝ居るのを見て、下の方の二重は己れには不用ない、是非第三重の樓だけを造れよと言ひ張つて、大工を困らせたことなどは、精進の意義を解せない話です、また、賢き醫者と愚なる王との話もある◎或國王の妃が一人の女兒を產まれました、スルと國王は大いに喜んで早速醫者を喚び寄せ、「朕の爲めに

この女兒を藥を以て、大至急に長大く致せよ」と仰せ付けられました、醫士は畏りまして「不肖ながら良藥をお勸め申し、長大くお成り遊ばすやう仕つりませう、併し今卒かに方術もござりませねば、早速藥の採集に取りかゝりまする、藥を獲てお勸め致すまでは、姫樣を御覽遊ばされぬやうにお願ひ致し置きます」と申上げて許しを得ました、ソコデ醫士は、直ぐ樣遠方へ藥を採りに參り、漸く十二年經つて藥を得て還りました、之を姫樣に服せました上で、十二年目に姫を父王に逢はせますと、王は久々振りに御覽になり、大いに喜ばれて、心の中に「實にこれは良醫である、姫に藥を服ませて卒かに大きくなした」と感心して、左右の者に命じて賞與を賜りました、時の人は王が姫の生れた年月を計ることを知らないて、只管藥の力で卒かに大きく成つたやうに思うて居られる無智を嗤つたといふことである、これ等は皆精しく進むのではなくて、一足飛びどころか十足も百足も一時に飛び刎ねるので小事を忽せにして大事を爲さうとしたり、脚下を見ずに千里の遠きを目指す

やうなもので、精進の反對でありまする、精進の精は、熟也、細也、的也、專一也で、米を段々としらげて、白くなり切つて純の純なる所に至れば靑くなる、その所を精といふのであるから、細事を棄て措いて成功を急ぎ、濡手に粟を攫むやうな投機的の勉强を精進といふのではありませぬ、この精進の眞意義は、御佛が涅槃の雲に御隱れ遊ばさる時、多くの御弟子達に向つて、最後の御說法あらせられた◎遺敎經に「汝等若シ勤メテ精進スレバ、則チ事トシテ難キコトナシ、是故ニ汝等當ニ勤メテ精進スベシ、譬ヘバ小水ノ常ニ流ルヽトキハ、則チ能ク石ヲ穿ツガ如シ、」と御示し遊ばされてありますのは、實に簡明にして適切なる、徹骨徹髓の御親訓ではありませぬか、小水の常に流るゝときは、則ち能く石を穿つが如しのお譬へは、精進の意味を遺憾なく說き明かされたものです、潺湲として流るゝ水も、絕え〳〵てなくて常に、この常にの文字に能く意を留めてその旨を味はなければなりませぬ、常は常住不斷にして暫くの間も絕えず進むのです、如何に小水でも暫くも絕え間なく

流れて居れば、大石に穴を穿つことさへ出來るのであります、さうして水の流れるのは、飛び〳〵に小さな穴などには、おかまひなく行き過ぎるものではない、必ずその坎に盈ちて順次に流れるものです、小事や細事を打ち棄てず、常恒不斷に努力しなければ、御示しの本旨には合ひませぬ、その勤勉するのも、たゞ自分一身の利益の爲めに、側目を觸らず勵むのではない、廣く一切衆生を濟度するの心懸けを以て、專心一意に進まなくてはなりませぬ、今、近年世界の交通の上に大便益を與へる爲めに、精通勇猛の大成功を遂げた人を擧げると、皆樣の能く知つて居らるゝことでせう◎西曆千八百六十九年にレセップの大精通

蘇士の運河を開鑿して歐洲の航路に一大便益を與へた、佛蘭西のレセップ氏です、彼の蘇士の運河がなかつたならば、世界の旅行者は非常な不便でせう亞弗利加の喜望峯の岬を廻るには、何千里といふ海を、而かも赤道直下の炎熱なる處で數日を費さねばならぬ、日露戰役の當時、波羅的艦隊の困つたのは、この蘇士の運河を通ることが出來なくて、喜望峯を廻らなければならな

いので、アノ通り暇取つたのです、レセップ氏はこの蘇士を開鑿して一夜の間に安眠しながら地中海へ乘り出すやうにしたならば世界の旅行者に洪大なる利益を與へることが出來るから、誓つてこの大事業を成し遂げやうと、それから先づ埃及の副王に面して、反覆丁寧に利害を說き、進んで佛國、英國士國等の諸邦を巡り、熱心に說き勸めますと、何の國も皆贊成したけれども英國だけは種々の事情があつて容易に承諾しない、ソコデ氏は再三再四辯論して利害得失を說き明しますと、サスガの英國も漸く贊成することになつたそれで直に各國へ株金の募集に取り懸りましても、寸善尺魔の譬へに漏れず一障拂ひ去れば復た一障、或はこの事業を妨害せんとする者、或は其成功を危む者、前後相接して、一方よりは猜疑し、一方よりは嫉妬し、衆苦其身に逼りて實に氏の困難は言ふべからざるの境界でありました、然るに皇天もこの人の熱誠を嘉賞せられたと見え、埃及政府から多少の資金を支出して吳れたので、氏は大いに喜び數萬人の工夫を集めて工事に取り懸りました、處が

折りも折りとて間もなく埃及の副王は死去せられ、其後を嗣がれた王は此事業には至極の反對で、前王の誓約をも破毀しやうといふ有樣、其上蘇士の地は、漫々たる赤野と茫々たる砂漠、炎天熱地焚くが如く蒸すが如く、役夫厭苦の聲は囂々として炎暑と共に熾んになり、加ふるに四方怨望の論は碌々として砂礫の數よりも多く、內外よりレセップ氏の一身を刺擊し來たれども、氏はこの譏謗百出の眞直中に卓立して、日々其仕事を監督して居られました、役夫等は炎熱の爲めに非常に疲憊し、剩へ疫病が流行し始めて死ぬる者が日に何百といふ有樣、伏屍累々として路傍に相枕藉し、滿目慘憺たる光景は實に視るに忍びず、巨萬の工費は已に竭きても大業は未だ半途にも至らず、百方調金に苦心はしましても、誹謗の聲は到る處に湧き出で、蘇士の地峽は到底開通することは出來ないであらう、若し開通の出來るものならば、三千年間氏に勝る智者もない譯もない、畢竟この開通事業はレセップの口から耳には聽き得られても、其成功を目で見ることは、此世では能はぬことであるなどと、紛々たる惡評は途に滿ちて爲めに大業も中途にて頓挫せんとしましたけれども、氏は屈せず撓まず忍ぶべからざる困難に甘んじ、晝は工事を監督し、夜は思慮を焦し、天に誓ひ地に願ひ、只管其成就を祈りましたが、千八百六十九年に至り十三ケ年間の長日月を經て、漸く此曠古の大業を竣功し、紅海と地中海とを通じて、如何なる大船巨舶もやす〳〵と航通が出來るに至り同年八月十五日各國の王公貴顯を招き、大渠開航式の盛典を擧げますと、誰れも彼れも皆氏の洪業を讃美し、天地も震くばかりの喝采を得られましたこれは氏が多年の間、忍ぶべからざるの誹謗と困難とに耐へ、屈せず撓まず勇猛精進せられてこの大事業を成就せられたのであります●華嚴經に「菩薩ハ衆行ヲ修メテ懈ルコトナク、勇猛ノ勢力能ク制伏スルモノナク、能ク一切ノ智門ヲ滿足ス」と仰せられましたが、今佛敎に依りて確固不動の信仰を得、過去に於て悔恨せず、未來に希望の光明を認め、現在日用光中正義公道に向つて活動して居りさへすれば、それが即ち精進勇猛と申すべきものであります

第十九座

禪定不動（上）

今席は禪定無念の箇條の上て御話申します、この禪といふことは、近來非常に言ひ囃されるやうになつて、誰も彼も禪學々々と、盛に禪學が勃興して、禪的官吏、禪的教員、禪的醫師、禪的實業家、まだ〳〵禪的女學生とか、禪的ハイカラとか、また坐禪豆や澤庵漬は禪的料理て滿洎なとか、何につけても彼につけても無性に禪を持ち出すやうになりましたが、それも惡いことてはありませぬ元來禪といふものは決して狹いものではなくて、高く禪的の眼を開いて見れば、墻壁瓦礫、雨竹風松、小萩に啼く虫の聲も、枯葉にそゝぐ露の音も、皆悉く禪ならざるものはない、詩人は詩に依りて禪に入ることが出來、藝術家は技藝に依り、實業家は算盤に依り、農業家は鋤鍬に依り、學者は學問に依り、藝妓は三味線に依りてゐても、何事てもその奥處に到れば、

そこて禪に入ることが出來るのてある、さうしてその禪の裡から活潑々地と現はれ出る仕事てなければ眞箇の活動ではありませぬ、所てこの禪といふ語は何のことであるか先づ第一にその義理から少々お話申さなければなりませぬが、禪とは禪那といふ梵語を略してあるので、その禪那とは支那の語に譯すれば、普通に靜慮即ちシッカにヲモンバカルといふことてすが、全體この禪には廣い意味があつて、翻譯も一通りだけではありませぬ、滅惡の義から弃と翻譯してある、弃とはステルの訓て、一切の惡といふ惡をステハナレルことになる、また生善の義からは功德林と譯してある、これは一切の善根功德が草木叢林の生い茂るが如くに集まるといふ義、また行の義から思惟修と譯してある、これは靜慮といふも同じ意味て、妄想雜念を離れて觀察思惟するからのことてある、斯樣に多くの義を含んて居るから、梵音のまゝを存して禪と申してあるのてす、そして定とは不變不動の義てあつて、心念の變動せぬことになる、それゆゑ、禪定の本義は攝心止住の義とも申すべきてあ

佛は先つ定に入つて說法し給ふ

ります、この攝心止住で心を一處に止住めて居なければ、物の眞相を觀ずることの出來る譯はない、佛陀が說法せられる時でも、法華を說くには無量義處三昧に入り、大般若經を說くには等持王三昧に入り、靜かに思惟して後に御說き遊ばされたやうに、その三昧に入るといふのは、即ち禪定のことで、禪定に入らずして說き示されたる御經はありませぬ、如何なる機根の者に向つては、如何なる法を說くべきかは、一旦心を止住めて三昧に入つた時、その心水の上に悉く炳現するのである、佛が法を御說き遊ばされる時、禪定に入られるのみではない、御互が何事を爲る上に於ても——尤も一寸皆樣のお考へ違へのないやうに御注意申して置きますが、佛が說法遊ばされる時にチヨット待つて臭れ禪定に入るからと仰せになつて、俄かに坐禪なんど遊ばされるのではない、定慧圓明萬德圓滿の御佛は、機に應じ緣に趣き橫說竪說自由自在に遊ばされるのであるから、行も亦た禪、坐も亦た禪、語默動靜悉く禪ならざるはないのでありますけれども、今は通常御互の情の上から申すの

輕躁なる醫者

てあります、御互が何事を爲るにも、自分の心が散亂して居たのでは、實際に於て活動することは出來ますまい、醫者が病人を診察するのに、自分の心臟が鼓動してビク〳〵して居るやうなことでは、到底病人の病症を眞實に診察することは出來ませぬ、昔、輕躁なる醫者が、病家へ行く時、帶刀を佩して出懸けるのに、餘りに急ぎ遽てゝ、帶刀ぢやと思つて、取り違へて檜木を腰に佩し、得意然として病家へ行くと、誰れも彼れも自分の顏を見てクックッと笑ひ出すから、先生更に合點が行かぬ、顏に墨でもついて居るのかと思へばさうでもない、背後の方へ指をさす者がある、ハテナと氣づいて腰の邊を撫でて見ると刀の銷の手當りが何だか奇態ぢや、これはと思つて能く〳〵見れば、是は抑も如何に、有らうことか、佩したる刀はまがう方なく檜木ぢや、そこで先生驚たの驚かないぢやない、嗚の馬鹿女郎奴、乃公が身仕度をする時に、擂木を腰にさゝせるとは何事ぢや、玄關まで送つて出ても未だ氣がつかないで、乃公にこのやうな取り返へしのつかない恥辱

を與へた、不埒極まる馬鹿者奴、畜度後日を戒めて呉れうと、癇癪玉を破裂させて眞赤になり、ムラ〳〵と怒つて猛り狂ひ韋駄天走りに我が家に駈け戻り、所が餘りに遽てたので、我が家と隣家と間違へて隣家の庭口に駈けつけ荒ら〳〵しく戸を引き開けて土足のまゝに飛び上り、隣家の夫人を引つ捕へ髻を攫んで其場に引き据ゑ、連けざまに打擲ぐり、この間抜け奴、よくもよくも乃公に恥をかゝせたな、主人が身仕度をする時に氣をつけないで、橘木なんぞをさゝせるとは何事ぢや、大勢の目の前で乃公は如何程の恥辱をかいたと思ふか、最早堪忍袋の緒が切れた、今日こそ目に物見せて呉れうと言ひながら、滅多矢鱈に打擲るので、その家の人々は打ち驚き、これは大變ぢや隣家の先生は發狂したと見える、何は兎もあれ大切な女房に傷でもつけられては大事と、その家の主人は早速醫者の手を捕へ、先生何を爲るのですか、これは私の愚妻ですぞと、言はれて先生不圖氣がつき、能く〳〵見れば隣の家、打擲つたのは隣家の夫人ぢや、南無三寶しまふたり、それから急いで遁

自己の散亂心を對治す

げ出し、自分の家に飛び込んで、自分の妻君の前に手をつき頭を低げ、只今は餘りに遽てまして頓だ失禮を致しました、何卒特別の御詮議を以て、御容赦下されませと丁寧に御辭儀をしたといふ話がありますが、恁麼な散亂したお醫者様では、迚も人の病氣を診察することは出來ますまい、こんな輕躁しいお醫者てせう、或時何所かの夫人が急病で迎へに來るとあはてゝ飛び出し病家に行つて、いきなり家婢の手を取り脉を見て居る、家婢は先生私は病氣ではありませぬ急病と申すのは奥樣のことてすといへば、その醫者はナーニこんな急な場合に誰れの彼れのと言つて居れるものか、誰れてもかまはぬ早く脈を見なければ間には合はない、サー舌を出せ胸を開け、注射ぢや灌腸ぢやと、大事な急病人の方は捨て置いて無病壯健なる家婢を捕へて診察したといふ珍談もある、この通り醫師が病人を視るにても、自分の心が散亂して居たのては、その病原を見届け　藥を與へることの出來る筈はありませぬ、精神界の大醫王たる御佛が億兆の衆生の苦より苦に入り、冥きより冥きに入つ

て、悲むべきこととてもなきことを悲み、喜ぶべきこととてもなきことを喜び、顚倒夢想の大病に侵されて居るのを、悉く濟度遊ばされるのには、御身に散亂の心のあらせ給はぬは申すまでもないこと、大寂定の裡より衆生の病原を觀じて、その病に應じて藥をお與へ遊ばされたのでありますが、散亂したる心を止住めなければならぬのは、たゞに醫者に限つた譯ではない、日用光中何事を爲る上に於ても、心は常に定の裡に住して居なければなりませぬ、處が兎角この心といふものは、コロ〳〵と轉び易いもので、孟子も學問の道他なく其放れたる心を求むるにありと言はれましたが、實際この心はお留守になり勝で、我家の犬や鷄が居なくなれば、近處近邊を探し廻る癖に、自分の心が逃げて居ても、それを求める者がないと言つて非常に歎かれた、誰れも氣のつかないものです、心猿飛び移る五欲の枝、意馬馳走す六塵の境、丁度御互の心は、猿が枝から枝へ飛び移るやうに、五欲、五欲とは財、色、食、名睡と言つて、金が欲しいが爲めに不正なことをしたり、色欲に迷つて不義を

はたらいたり、食物を貪つて身を傷め、名譽を得たくて僞善を裝ひ、睡眠の度を失うて智慧を味まし、また、申して、眼は色に耳は聲に、舌は味、身は觸れる上に心は萬法の上に、それからそれと展轉して、暫時の間も止住まつて居らぬものです、●涅槃經に『心若シ散亂スレバ則チ正念ヲ失フ若シ正念ヲ失ヘバ則チ善不善ヲ觀ズルコト能ハズ、若シ善不善ヲ觀ズルコト能ハザレバ則チ惡法ヲ行フ、惡法ノ因緣則チ地獄畜生餓鬼ニ墮ス』とありますが、恐るべきは散亂の心であります、

禪定不動（下）

皆樣、前の涅槃經の御文を拜讀しますれば、我身を顧みて實に寒毛卓立するを覺えるではありませぬか、心若し散亂すれば即ち正念を失ふ、若し正念を失へば即ち善不善を觀ずること能はず、若し善不善を觀ずること能はざれば即ち惡法を行ず、惡法の因緣即ち地獄畜生餓鬼に墮すとありますが、水も濁

水も波を立つれば萬象の影を印せす

正念を失へば善惡を識別する能はす

つて居たり、風の爲めに波が立つて居ては、物の影を映すことは出來ますまい、風もなく波もなく溶々と湛えて、而かも澄み渡つて居れば、正しく一切萬象の影を映し出すことが出來るのである、鏡でもその通り、面が曇つて居ましては、如何なる美しい物が前に現はれても、その姿は映らない、一點の曇りもなく明皎々と輝いて居れば、胡來れば胡現じ、漢來れば漢現じ、更に私ないその形を映すのである、丁度御互の心も、散亂して居るのは水が濁つた上に波が立つたり、鏡が曇つて居るも同樣で、忽ち正しき念慮を失つて、善いことも惡いことも識別することが出來ない、即ち煩惱妄想に追ひ驅られて、種々樣々なる惡事を働き出す、その惡事の因緣で地獄餓鬼畜生の三惡道に墮落して、浮ぶ瀨のなき苦みを受けるやうになるのであります、その心水に波を立たせたり、心鏡に曇を生じさせる煩惱妄想の根原は何物であるかといへば、即ち貪瞋痴の三毒である、この三毒のことは、皆樣最早能く御承知の通り、貪とは順境と言つて己れの氣に適つた物の上に起す欲の心で、無暗に物を欲しがりムサボルこと、瞋とは、逆意と言つて己れの氣に合はない、思ふ通りにならない時ムラ々々と怒ること、癡とは、一切萬法の現象本體のマコトの理が分らず、因果の道理を撥無すること、この三毒煩惱の爲めに心を亂されて、正しき念慮を失ひ、善も不善も觀ずることが出來ないで、種々の惡法を行するから、三惡道に墮ちるのであると涅槃經に御示し遊ばされたのであります、この道理を高僧面山老和尚は、◉『夫レ人々ノ心ト思ヘルモノヲ、先ヅヨク々々細ニ道理ヲ考フベシ、アルヒハ瞋恚トナリ、又ハ愚癡トナリ、又ハ貪慾トナリ、コノ三毒ガ善惡ト分レテ、惡ノ方ニツイテカタマレバ、瞋ハ地獄トナリ、癡ハ畜生トナリ、貪ハ餓鬼トナル、善ノ方ニツイテカタマレバ、瞋ハ修羅トナリ、貪ハ人間トナリ、癡ハ天上トナル、シカレバ念起ハ一ツナレ𪜈、善惡ナキニアラズ、善惡ハ二ツナレ𪜈、トモニ三毒ナレバスナハチ六道トワカルナリ』とお示しになつてあります、御互の心と思ふ者を能く々々道理を考へて見ると、貪となり、瞋となり、癡となり、この三毒が惡の方に働けば三惡道に

墮ちて、永劫の苦みを受けねばならぬけれども、一たび禪定に入つて、本心本性を徹見したならば、妄想を除かず眞を求めず、無明の實性即佛性て、三毒が直に法般解とも、法報應とも、智斷恩の三德ともなるのてあります、その妙處に至るには、先づ第一に散亂麁動の妄心を解脫しなければならぬ、その妄心を解脫するには、是非共禪定に依つて心を靜めなければなりませぬ、或禪師は坐禪の必要なることを說かれて、上は天が下をしろしめす大君より、大臣とか紳士とか言はれる人々は勿論、下庶人に至るまで、外部の誘惑の爲めに明德を暗まされてならぬ、即ち煩惱妄想の爲めに、佛性を暗まされてはならぬ、それゆゑ孔子も大學の眞ッ始めから、禪定を說いて靜慮を勸められてある●「大學ノ道ハ明德ヲ明カニスルニ在リ、民ヲ親ニスルニ在リ、至善ニ止マルニ在リ、止マルコトヲ知テ而シテ后定マル有リ、定ッテ而シテ后能ク靜ナリ、靜ニシテ而シテ后能ク安シ、安ウシテ而シテ后能ク慮ル、慮ッテ而シテ后能ク得」明德を明かにすると言ふのは、佛敎て言ふ所の涅槃とか、佛性とか菩提

といふ語と、たゞ言ひ方が違つて居るだけのことて、明德を暗ますといふのは煩惱の爲めに佛性を覆ふはれることてある、その明德を明かにするには是非共靜かに慮らねばならぬ、靜かに慮つてそれから后に爲ることはゝ、左之右之悉く矩を踰えないやうになつて行くのである、シテ見れば孔子は大學の始めから坐禪をすゝめられたのではあるまいかと言はれたことがありますが、實にさうです、大死一番大活現成で、大いなる仕事を爲さうと思へば、大いに休息しなければならぬ、鳥が高く飛ばうとする時は、必ず丈を縮めて大いに下に力を入れる、活潑なる大仕事を爲るには、ペコ〳〵と足が浮いて、下腹に力が入つて居ないやうなことては、何を爲ることも出來るものてはない先づ靜かに慮らなければならぬ、早い談が皆樣ても前の夜一晩だけ眠らず休息せずに居られたならば、翌日は頭腦が朦々として活潑なる仕事は出來ないてせう、大いなる仕事は、大いなる休息を要するものてある、活潑なる行動は、寂靜なる思慮がなくてはならぬ、伸びんとするものは、豫め屈せねばな

らず、放たんとするものは、先づ控へねばならぬ、そこが即ち禪定の妙處なので、一たび寂靜無爲の極處に至つて、その後の云爲動作は、横拈倒用自由自在である、一莖草を拈じて丈六の金身と爲すことも出來るが、拂子頭上に三世の諸佛を宿すことも出來、須彌を芥子に容れ、一微塵より大千の經卷を出し、微塵眼底三千界、拄杖頭邊四百州、造次顚沛が悉く禪となつて、「坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人を深山木に見て」といふやうな境界になることが出來るのであります、斯うなれば貧の時は貧に處し、富んだ時は富に處し、行かうと止まらうと、死なうと生きやうと、更に一點の曇りも心に留めない、寒むければ寒いまゝ、熱つければ熱いまゝ、何の苦しむ所もないのです、この熱い寒いといふことについても、祖師様方の出逢ひの問答などは餘程面白いことがある、名高い公案に寒熱不到の話と言つて、洞山良价と申し上げるお祖師様に、或僧が問ひ懸けて、それにお答へになつた實に簡明適切な、小氣味のよい語があります、この語の拈提は到底この座では、仕て居る譯には參りませぬから、その出逢ひの公案は讀むだけでも、時節柄清凉劑ともなります、こゝで讀み上げますからお聞ください、◉「洞山因ニ僧問フ、寒暑到來如何ンガ廻避セン、師云ク何ゾ無寒暑ノ處ニ向ッテ去ラザル、僧云ク如何ナル是レ無寒暑ノ處、師云ク寒ノ時ハ闍梨ヲ寒殺シ、熱ノ時ハ闍梨ヲ熱殺ス」といふのです、この一段の問答は講釋はいたしませぬが、寒の時は闍梨を寒殺し、熱の時は闍梨を熱殺すといふ語は繰り返へして讀んだ丈けでも、實に津々として盡きざる趣があるではありませぬか、寒の時は徹底寒てある、熱の時は徹底熱てある、寒も一時の位、熱も一時の位、熱になり切つてしまへば熱の熱とすべきものもなく寒になり切つてしまへば寒の寒とすべきものもない、水の中に棲む魚は濡れるといふことはなく、蓼を喰ふ虫は辛いことは知らない、寒の時寒殺すれば避寒するにも及ばず、熱の時熱殺すれば避暑に出懸ける苦勞はない、心頭を滅却すれば火も亦凉しとは此處のことてある、丁度白樂天の詩に、人々避暑走如狂。獨有禪師不出房。可是禪房

散亂煩惱を對治して寂靜無爲を得

無熱到。但能心靜即身涼と。あるやうな境界に到れば、北窓一枕松風を聞きつゝ華胥槐安を逍遙することも出來るのである、大層談が難解しくなりましたが、兎に角この境界に到達するには、散亂麁動の妄心を對治して寂靜無爲の安心を得なければなりませぬ、その安心を得るは禪定より入のです、古から聖人とか賢人とかいはれた人々は申すまでもなく、苟且にも一事を成し遂げた人で、禪定を缺いだ人はありませぬ、楠正成が一大事に臨んで、明極楚俊禪師より一劍天に倚つて寒し云々の商量をしたのも、大石良雄が良雪和尚から、當に一死以て君恩に報ずべきの秋なり何の當惑すべき事かあるといはれたので、豁然大悟して美事に君の仇を擊つたのも、皆平生に於て禪定の力により、心を寂靜の境に置いて居たからでせう、皆樣が各々その職に從つて努力する上に、常に散亂の煩惱を離れて心を無爲寂靜の境に遊ばせて居られたならば、行も亦禪坐も亦禪、語默動靜悉く禪となつて、擧手投足自由自在の活動が出來るのであります

第二十座

智慧明鑑（上）

五度も智なければ愚盲に同じ

久しく通佛教信仰箇條の順を逐うて御話申して居りましたが、イヨ〳〵この智慧明鑑の一座で終了いたす都合であります、長らくの間能く皆樣御退屈なく聽聞なされました、今一座だけ御辛抱下さるやうお願ひ申します、この智慧明鑑と申すのは六德行即ち六波羅密の中の第六般若波羅密でありまして、智慧といふのは人々本有の靈光で、六度の中の最も大切なる箇條であります それゆゑお經には ◉『五度智無ケレバ愚盲ニ似若リ、所以ニ般若ハ世間ニ勝出シ諸有ヲ破除ス』とお示し遊ばされました、五度智なければ愚盲に似たり六德行の前の五箇條は、この昭々たる靈智を以て制裁しなければ、愚盲に似たりて盲も同樣、悉くその度を失うてしまひます、たとへば第一の布施仁愛についても、物を憐み施しをするにも、若し智慧を以て靜かに考へて

智を以て察せざれば非理を以て罔ひらる

見なければ、トンだ失敗を招くことがあります、如何に物を愍んでも、孟子が欺く可し罔ふ可からずと言はれましたが、惻隱の心は誰れでも皆有りますから、何か哀れなことを言ひ立てゝ、道理を以て欺けば、隨分欺かれないこともないが非理を以て罔ふることは出來ないものです、ところが若しこの智慧を以て觀察しなければ、非理を以て罔ひられることを免れませぬ、それを例して言へば、向ふの河に人が陷ちて流れて居る可愛さうではないか救つて遣らないかと、さも憐れな口調で欺けば、誰れでも惻隱の心に催ふされて、早速河端まで駈けつけて見るでせう、それは理を以て欺いたから欺かれたのです、行つて見れば河の中には誰れも陷ちては居ない、居ないことが明かに分つて見れば、最早それから後は罔ひられるものではない、それをアノ河の底に沈んだから是非這入つて救へと言へば、非理を以て罔ひると言ふものです、其時あゝ可愛さうぢや愍れぢやといふ心に覆はれて、明かなる智慧で鑑みなければ、その非理に罔ひられて、己れの身を沈めるやうな愚に陷ること

馬鹿正直橋下に溺る

を免れませぬ、この通り慈善々々といふ上にも、智慧がなければ愚盲と同樣であります、第二の持戒でも、自己の靈光が昏んで居ては、正直は正直でも馬鹿正直になつてしまふ、◎丁度昔或支那人の馬鹿正直者が、女子と橋の下で密會することを約束し、その男が早く橋の下まで行つて、何時までも待つて居たが勿々女が來ない、その間に水が段々と增して、足から股から後には頭の上まで越して來たので、その男はトート橋の柱を抱いたまゝ溺れ死んだといふことである通り、正直も智慧のない正直は馬鹿正直、矢張愚盲に似たる者であります、第三の忍辱でも、理性に訴へない忍耐は、苦行外道などのやうに常識はづれの忍辱になつてしまふ、また第四の精進でも、明かなる智慧の判斷によらないで、たゞ己れの情欲の儘に任せて勉强すれば、人道の軌轍を脫れて、不義不正の行爲をするやうになるかも知れぬ、盜人でも夜の目も寢ないで苦辛經營、隨分働くことは働いても、不正不義の働きと申さなければなりますまい、その次の禪定でも、尤もこの禪定は今お話申す智慧明鑑

とは離るべからざる關係があるので、元來禪とは定慧均等といつて、定と慧とが均しく具はらなければならぬ、禪定の力に依りて煩惱の迷雲を拂ひ去れば、自心本有の靈光が自然に顯はれる、この智慧の光が顯はれまするとと、無明煩惱の黑暗は何時の間にか消え失せて了ひます、そのことを釋迦牟尼佛は

◉『若シ智慧アレバ貪著ナシ、常ニ自ラ省察シテ失アラシメザレ、乃至、無明黑暗ノ大明燈ナリ、一切病者ノ良藥ナリ、煩惱ノ樹ヲ伐ルノ利斧ナリ』と御示し遊ばされてあります、この大明燈なる智慧の靈光は、禪定の力に依らなければ得られませぬ、『夫レ神通ノ勝業ハ、定ニ非レバ生ゼズ、無漏ノ慧根ハ、靜ニ非レバ發セズ、』とある通り、禪定の修行力に依られば、眞箇無漏の大智慧を發することの出來る道理はありませぬ、智慧の光が顯はれなければ愚癡迷蒙の裡に彷徨うて、作ること爲すことが、不義に陷り不正に走り、暗愚の笑を免れませぬ、この暗愚を解脫するのが智慧明鑑の精神であります、暗愚なる者は、總て輕重得失の比較を考へることが出來ないから、何事でも

悉く度を失うて居ります、佛樣が本生經をお說き遊ばされる時、愚なる子のことを引き合ひに出されたことがある、◎或老爺が我が子を連れて水邊へ行き、衣服を洗濯して持つて歸りましたところが、餘りに暑さが烈しいので、熱の氣に中てられた或樹陰に依り、差當りその着物を枕にして休息して居ましたが、暫くの間に熟睡してしまつた、すると何處からか一疋の蚊が飛んで來て、老爺の禿頭を咬み入つたので、側に見て居た子は大いに怒り、惡き蚊の奴目に物見せて、吳れんと、手頃の樫棒を眞ッ向に振り翳し、その蚊を目懸けて力の限り擊ちつけると、蚊はブイと輕く飛び去つて、老爺の禿頭からは唐紅の血潮が迸り出て、ウンと叫んでそのまゝ息は絕えてしまいました、その時に樹神が偈を說いて

寧與智者一讐。不與無智一親。愚爲父害蚊。蚊去破父頭。

と言つて愚昧の者を戒めたことがあると、御說きになつて、若し明かなる智慧を以て觀察することが出來なければ、憐むべき愚を演ずるものであるとお示し遊ばされて

あります、兎角愚かなる者は、物の眞相を鑑みることが出來ないが、自分がそれ相當な自惚を起して居るものです、香油を髮に塗つて、自分の髮がよい香を出すのぢやと思ひ、白粉を顏に塗つて、吾が顏が美しいと誇るやうな憐れな仕打をいたします、◎大莊嚴論にその例が引かれてある、或る長者の嫁が姑にいぢめられ、とても辛抱が仕切れないで、家を逃げ出し林の中へ這入つて自殺でもしやうかと思つたが、それも出來ないで愚圖々々して居る間に向ふから何處の家婢か手桶を提げて來かゝるので、急に其處の池の邊の樹に上り、枝につかまつて居りますと、その家婢が池の中まで水を汲みに參りましたところが、水の中に美しい女の姿が映つて居るのを見て、家婢先生それを自分の姿であると思ひ込み、『これほど美しい容貌をして居る妾に、水汲みなんどさせるとは何事か、ホンに忌まゝしい』と言ひながら、その手桶をメチヤ〳〵に毀してしまひ、早速家へ飛んで歸り、檀那に向つてさも腹立たしげに『檀那さん妾の顏はこんなに美しいのに、何故水汲みなんどさせるのですか、餘り酷いぢやありませぬかと、眞つ赤になつて饒舌り立てましたので、檀那は驚いて此奴は狐にでも魅されて、こんな我儘を言ひ出したのかと思ひ、更に一つの手桶を出して、『馬鹿なことを言はないで、水を汲んで來い』と命令ました、家婢はまたその手桶を提げて池に行つて見ると、矢張美人の姿が映て見えますから、再び腹を立てゝ、妾のやうなこんな美人に水を汲ませるとは』と言ひながら、亦ぞろその手桶を打ち毀はしました、長者の嫁は樹の枝の上でこの有樣を見て居りましたが、餘りの可笑さに辛抱し切れないでクツ々々と笑ひ出した、家婢は水の中の姿が笑ひ顏になつたのを自分は今腹を立てゝ居るのに、何故妾の影は笑つて居るのか知らと思ひながら、よく〳〵見て居る內に、上の方に笑ふ聲がするので、オヤッと魂消て上を見ると一人の立派な身形の婦人が、枝の上に微笑んで居る、家婢は始めて池の中の姿はその美人であつたことが分り、非常に恥ぢ入つたといふことがあります今の世の中には、これに似寄つたことは隨分多くあるでせう、己れに實力が

なくて、虚名虚聲を張り、自分では天晴れ天下の名士ぢやと氣取り込んで居ても、識者の眼から見れば實に憐れ千萬なる事柄が限りなくあることでせう皆これ等は眞箇の智慧が昏んで居るのです●佛所行讃經に『癡闇ヲ深水ト爲シ、愛欲ヲ巨浪ト爲シ煩惱ヲ浮沫ト爲シ、邪見ノ摩竭魚、唯ダ智慧ノ船ノミ有リテ、能ク斯ノ大海ヲ度ス』と御示しになりました通り、この癡闇、愛欲煩惱、邪見が、水となり浪となり、法性海中を攪き廻して、濁りを擧げて居るのは明かなる智慧の巨船に、禪定の錦帆を擧げて進みさへすれば、美事にこの大海を渡ることが出來ます

智慧明鑑（下）

智慧といふ中にも、世間には世間相應の智慧があり、出世間にはまた出世間相應の智慧があります、出世間の智といふにも、聲聞の智もあれば緣覺の智とか、菩薩の智とか、それにはまた、道慧智、道種智、一切智、一切種智等と分れ、佛界の智にも、成所作智、妙觀察智、平等性智、大圓鏡智などゝ申して、これ等を一一說き明しをすれば、數も限りもありませぬから、今はお預りと致して置きますが、普通世間の智慧といふ中にも、種々様々の智慧があります、惡智慧もあれば、猿智慧もある、善い方に働くばかりでなくて、惡い方にのみ利く智慧を持つた者が隨分澤山あるのです、色々なる工夫を凝らして詐僞をはたらく輩がある、官書を僞造するやら、手形の贋作から株券や紙幣までも贋造する者がある、これ等は遲鈍な者では爲ることは出來ますまい、甚だしきは竊盜や强盜などゝ働くやうな者でも、種々に工夫してその手段を講じたり、苦辛慘憺の上に不義の快樂を求めるのは皆惡智慧の働きと申さなければなりますまい、ところが、斯様な惡手段を考へ出す心の作爲は、實は智慧といふ名を與へる道理のものではないので、これ等は全く智慧ではありませぬ、すなはち正知見を覆はれたる心から案出せられたのであるから智慧ではない邪見といふものです、邪見であるから萬事萬端の因果の理法を

猿智惠の例

撥無して、作ること爲すことが不義不正となつてしまふのであります、その正智見を覆ふたる邪見の迷雲を掃はなければ、眞實の正智は顯はれるものではありませぬ、『一智ノ箭ニ駕シテ衆魔ノ軍ヲ破リ、一慧ノ刀ヲ揮ッテ群疑ノ網ヲ斬ル』といふ自由が利くやうになれば、自然と所謂惡智慧は退散するに至るのであります、また、世間には猿智慧といはれるやうな小利口なる人もある、所謂『物知』と名の附く先生て、奥行が狹くて間口の廣い人、少々筆も立つて文章も書けるが、それも人の惡事を發き出すくらゐの毒筆、漢詩も眞似るが物には成らず、俳句もやれば新體詩も列べて見る、茶道も、花道も清元新内踊りから義太夫、何でも彼でも殘らず知つた振りの人があるものですが、惡慶な人は何を爲ても成功せず、食へなくなつて商賣にでも手を出す氣になるが矢張駄目、昨日は骨董店、今日は早や古本屋、朝には豆腐屋かと思へば、夕には燒芋屋といふ始末、破れかぶれに相場でもッと思うて見ても資本はなく、人車を挽くには腕力がなく、辻占賣りにも豈夫になれない、乘

つたか逸つたか天下の政治家氣取りて以て、破落戸壯士に爲り澁まし、他人のお先き棒に使はれて、餘りの汁を頂戴いて漸く糊口をして居つて、後には他人の犧牲と爲つて一命を終へるやうな人が、猿智慧の者には隨分澤山あるやうてす、それ等は丁度佛様が譬喩經に、野狐と獅子の話をお引き遊ばされたのと同じことである、何處かに一匹の野狐があつて、始終或獅子のお供をして、その後に附隨て歩いては、その用に追ひ使はれ、獅子が食つた後でその殘り物を貰つて喜んでそれを食ひ漸く生活をつけて居りました、或時その獅子が飢えて彼處此處を食物を探し歩きましたが如何しても食物を見付けるとか出來ませぬ、イヨ〳〵飢えて耐へられなくなつたので、背後を振り向き野狐を目懸け、覺悟はよいかと言ひながらたゞ一呑みと噛みついた、すると狐は獅子の咽喉の小口で手を合はせ、親分何卒殺すだけは許して下さい、惡慶な難儀の御用でもいたします、年が年中追ひ使つて居た者を食ひ物にするとは、餘りと言へば同慾なと、涙を流して愚痴をこぼしますと、その獅子

佛の垂誡

が、平生貴樣を肥やして、養うて置いたのは、こんな時の役に立てる爲めであつたのぢや、堪忍しろと言ひながらたゞ一口に呑み込んだことがあるとお示しになつてありますが、丁度前の猿智慧の人も、この狐智慧と同じことで眞實の智慧ではなくて、皆迷ひの邪見と申すものである、お先き眞ッ闇みで作ること爲すことが悉く正義公道の軌轍を脫れて、冥きより冥きに入つて、遂に自滅に陷るやうな悲境になるのです、自分では非常なる智慧を持て居る心算ではあらうけれども、實際は智慧どころではない、愚癡迷妄の甚だしいものと申さなければなりませぬ、眞實の智慧といふものは、その愚癡迷妄の闇黑を照し、邪見の煩惱を截り破るのである、前に佛語を引ましたる通り、無明黑闇の大明燈なり、煩惱の樹を伐るの利斧なりで智慧の大燈明を點ずれば、愚癡の闇黑は忽ちに滅するものである、正法經に出て居ります◎釋迦牟尼佛が、或時迦葉尊者に向つて御問ひになるのに、岩窟の空舍に明り牖もなく、また住人も居なければ、百千年の間でもその舍は眞ッ闇黑であらう、時

智慧とは人の本有の靈光

に天人が有つてその空舍に燈明を點したならば、迦葉よ汝は何と思ふか、その愚暗が己れは百千年もこの空舍に住んで居るから、空舍一寸も退かないと威張り出して何時までも、その空舍に居ると思ふか如何ぢやと、お問ひ懸けになると、迦葉尊者は、否々世尊、彼の愚暗は別に力はありませぬ、燈明の光が若し照しますれば、愚暗は威張つて居ることは出來ませぬ、決定遁げ出して燈明に占領せられてしまひますと、お答ひ申上げると、佛は御懇切に、迦葉よ彼の業煩惱の愚暗もその通り、百千刧の間彼の識中に住して居ても、若し行人がたとひ一晝夜たりとも正觀相應して智慧の光明が生じたならば、業煩惱の愚暗は忽ちに所を失うて遁げ出すものであるぞと、御示し遊ばされてある、この意を演義の中には◉『知能ク愚ヲ滅ス、愚ハ智ヲ滅セズ、藥能ク毒ヲ去ルモ毒ハ藥ヲ去ラザルガ如シ、亦猶明能ク暗ヲ滅スルモ暗ハ明ヲ滅セザルガ如シ』と說かれてあります、その智慧と申すのは、人々本有の靈光であつて、少しく語が難解しいでせうが、無始より已來、常住淸淨、昭々と

長者の一子跪跰す

して味まさず、了々として常に知る所の佛性であります、この佛性なる智慧の光明が、煩惱の雲の爲めに暫く明光を覆はれて居るけれども、愚は智を滅せず、暗は明を滅せずで、本有の靈光は決して毛頭も損失するものではありませぬ、鏡に曇はかゝつても、光その物を侵すことは出來ない、塵さへ掃ひ去れば光は自然に現はれるのであります、そのことは佛樣が◎法華經の中に長者窮子の譬喩を以てお示し遊ばされたる有名な話がある、その大意を申せば、或長者の總領息子が不圖家出をして、追々遠方へ行つた切りトート迷ひ子となつて、自分は長者の子であるといふことを忘れて、跪跰窮子と零落れ果てゝしまひました、忽ち糊口に窮するので非人乞食の仲間入りをして、破れた菰に缺け碗一個、彼方此方と流浪して居る中に圖らずも、自分の生れた長者の家の門に立つて食を乞うて居る、父の長者は早くも我が子であることを覺りよく〳〵見れば見る影もなく窶れ果てゝ居るその狀、何は兎もあれ番頭に言ひ含めて、門の中へ召び込ませると、息子の方では元よりこれが自分の生れた家とは知りませぬから、吾はこの家に對して何か不都合のことでもあつて、いぢめられることゝ思ひ、恐れて遁げ出しますので、父は深く悲しみ急に賤しき姿をした僕を馳せて息子を捕へさせ、種々と宥めて兎も角も暫くの間は、庭掃き拭き掃除などさせて置き、その子が家の樣子も餘程知れて來た時に、次第々々に取り上げて使ふやうにして、さて四五年も經ちましてから、窮子と召使ひの者共一同を呼び集め、從來の秘密を悉く打ち明けて談しましたので、窮子は愈々親子の名乘をすることを得、長者の家督を殘らず相續して身心歡喜いたしたといふ教訓を示されました、長者の一子なる本來法身の御互が本覺眞如の寶城を迷ひ出で、貪瞋癡慢の破れ菰着て妄想執着の缺碗を持ち、五欲六塵の殘羹を立ち食ひするやうな淺間しき境界となり下つて居るのであります、それは取りも直さず正知正見の本法性が、煩惱の雲に覆ひ隱されて居るのであるから、日々夜々にこの業煩惱の迷雲を拂つて正しき信仰を以て菩提の大道に進んで行かねばなりませぬ、その心得は御佛が

『汝等當ニ聞思修ノ慧ヲ以テ、而モ自ラ增益スベシ』と御示し遊ばされてあります、耳に達するのが聞、心に理を究むるのが思、身に行を起すのが修てある、これを三慧と申すので佛陀甚深の妙法は、これを耳に聞いて、心に思ひ、身に修して行かなければならぬ、若しこの聞慧がなければ覆器というて蓋をしてある器の水を容れることが出來ぬやうなもの、思慧がなければ漏器と言うて、水を盛つても直に漏れてしまふやうなもの、また修慧がなければ穢器と申して、穢れた器で用ゐることが出來ないやうなもの、この三慧を全うして始めて清淨なる法器となるのであります、古歌に『耳に聞き心に思ひ身に修せば、早晩か菩提に入合の鐘』とあるのはこのことである、御互に早く眞實無漏の大智慧を磨き出し、これを一切時一切處に應用して、佛弟子たる者の面目を持ち、信心堅固の身を以て、上は四恩に報答し、下は一切衆生を濟度するの心懸けを忘れぬやうにいたさねばなりませぬ、長々信仰箇條の順を逐うて御話申して居りましたが、諸佛諸菩薩の加被力と、護法諸天の擁護とに依り、無事に演了することを得ましたのは、感謝の至りに堪へませぬ

上來の安心門と起行門との信仰道徳が皆樣の身に具はれば、任運と眞如法界無上佛果菩提の極地に到られるのでありますから寢ても醒めても正念相續が肝要であります

衆生無邊誓願度　煩惱無盡誓願斷

法門無量誓願學　佛道無上誓願成

南無十方常住三寶

連座說教　終

後序

言語を以て道を公衆に傳ふるの法、蓋し三あり、共に人心の要求に出づ、其智を主とするものを講義といひ、情を主とするものを說教といひ、意を主とするものを演說といふ。故に講義を示す所は說明的にして演說の云ふ所は勸誘的なり、勸誘的なるものは實行的倫理的となり、說明的なるものは智識的科學的たるを免れず、獨り說教は情を主とするが故に其傳ふる所は純宗教的にして感化的なり。もとより人心の三方面の明確に區別する能はざるが如く傳道の此分類も亦明確なる能はずして講義の中にも情意を加へざるべからず、演說の中にも智情を除くべからずといへども智慮分別を超越したる宗教の眞風光を示すには其功說教に過ぎたるはなし。所詮講義と

演說とは其範圍に於ても効果に於ても說教に及ぶべくもあらじ。されど今日の如き說教にて此目的を達し以て傳道の功を奏し得べしとは思惟する能はず。今の說教は餘りに感情に流れたり、仰信を旨として解信を忘れたり、以て智に疎く、意に力なき翁媼を化すべきも、以て智に鋭く意に力ある靑年を化する能はじ、之れに加ふるに智を以てし、之れに交ゆるに意を以てし、講義演說の長所を採て說教の短を補ひ、こゝに新時代の新說教として新時代の人を感化するに足らむか

松浦百英和尙は教界屈指の雄辯家なり、一たび口を開けば行くとして可ならざるなく、講義となつては事理明晰、演說となつては詞格峻邁、今や其長所を發揮して連座說教を著はす、熱烈なる信仰、人を動かし、流麗なる言辭、人を感ぜしむ、說く所は普く人心の三方面に亘りて能く新時代の新要求に應ず。此書の如きは眞に新說教の先驅といふべきか

戊申二月涅槃忌後二日、梅影窓に當りて芳香室に滿つ、陽春此花兄を魁として駘蕩の候に向ふ、一部の連座說教希くは教界の魁を爲して百花爛漫の春に向はんか、窓を開けば月天に高く、霜地に白し

三界一門樓に於て

嘯堂居士

明治四十一年四月七日印刷
明治四十一年四月十[illegible]日發行

連座說教奧附
定價金壹圓五拾錢
郵送料金拾貳錢

編輯人　細川道契
佛教團本部代表者
東京市芝區愛宕町壹丁目十六番地

發行兼印刷者　永田顯了
東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

印刷所　株式會社秀英舍
東京市芝區愛宕町壹丁目

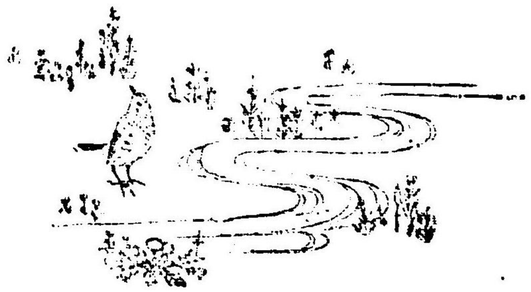
發行所　佛教團本部

發賣元　東京市芝區愛宕町壹丁目十六番地　佛教館
振替口座番號二九四六

大賣捌
東京市芝區露月町　鴻盟社
東京市飯倉町五丁目　森江書店
東京市神田西紅梅町　光融館
京都市二條木屋町　貝葉書院
京都市三條通高倉　出雲寺書店
名古屋市門前町　其中堂

佛教團本部藏版

不許複製



佛教館發賣書目 ◉

◎天覽 **佛教人生論**（高田道見師著）洋本一冊 紙數千頁 ●定價貳圓卅錢 送料不要

▲本書は釋尊の教勅により人生の一代問題を解決して安心起行の方針に向はんとする書のために極めて平易に問答體に佛陀の出現より吾人の本末始終を說示せる大著也

◎**從容錄講話**（高田道見師筆）上下四冊 和綴帙入 ●定價金四圓 郵送料不要

▲本書は碧巖集と伯仲せる禪宗の第一書たり天童正覺禪師の頌古萬松老人の示衆著語有古來難解と稱したるも此通俗講義によりて釋然たり公案百則示衆本則頌古著語を擧て一々簡明に講ず

◎**通俗佛教便覽**（著者同前）紙數六百頁 總クロース ●正價金六拾錢 郵送料金十錢

▲本書は通俗佛教一席話、追善の心得、通俗三世因果、四恩一夕話、十善一夕話、家庭教訓、家庭美談、般若の功德、盆の由來、塔婆の由來等二十種の小冊を合本と爲したるものなり

◎**通佛教安心**（著者同前）全壹冊 ●正價金三拾錢 郵送料金六錢

▲本書は問答體に筆を起し通俗平易に佛教の根本原理に由り宗派佛教の安心義に偏倚せず直に大乘佛教の大旨に依て安心起行の方針を痛快に指示せし者にして初學の入門は本書を第一とす

◎**正信無常觀**（著者同前）折本壹卷 ●正價金六錢 郵送料二錢

▲文字簡潔意義深遠、僧俗の別なく朝々夜々常に諷誦すべき通佛教の新經典たり、是れ著者が畢生の全力を注いて此の美文を綴りたるもの大活字にして振りカナを附したるものなり

◎**佛教疑問解答集**（著者同前）第三篇 ●正價金壹圓 郵送料金十錢

▲本書は教義上に關する諸種の疑問に對し噛て含める如く一々明瞭に解答せし未曾有の珍書也

◎**佛教問答集**（著者同前）全壹冊 ●正價金五十錢 郵送料金八錢

▲本書も亦前書と同く三十餘種の疑問に對して痛快に解答を附したる輕便必須の珍本なりとす

◎**物外和尙逸傳**（著者同前）頗る美本 ●正價金廿五錢 郵送料金四錢

△本書は二百五十人力を具したる擧骨和尙の逸事奇談を面白く書き綴りたる珍書なりとす

◎**連月說教**（高田道見師著）全一冊 ●代金參拾錢 送料金六錢

▲本書は毎月の說教を聞く餘暇なきものゝため座ながら法理を知ら令んとて出版せしもの也

◎**聖僧乞食桃水**（編者同斷）全壹冊 ●代金貳拾五錢 送料四錢

▲本書は理想のみを高きに求めて實踐躬行の出來ぬ時勢的流行病の解熱丸也

◎**佛教演說軌範**（加藤咄堂君著）全壹冊 ●代金四拾錢 送料六錢

▲本書は時代に適する演說凡三十席を叙述す巧妙の辯雄大の筆實に天下の珍書なり

◎**婦人の鑑**（高田道見師著）全壹冊 ●代金參錢 送料貳錢

▲本書は佛說玉耶女經を講義せしのにて佛教的婦人の必讀要書なり

◎**禪門常用經典**（全師和譯）全壹冊 ●代金參拾六錢 送料四錢

▲此經は在家の人のために禪宗常用の御經廿餘種をノベ書きにしてカナを附せしもの也

◎**觀音經**（全）全壹冊 ●代金六錢 送料貳錢

▲此御經は娑婆有緣第一の觀音普門品をノベ書にしてカナを附せしものなり

通佛教郵便傳道誌 **眞如界**（高田道見師主筆）毎月一回發行 一ケ年金廿四錢

○此雜誌は一宗一派に偏せず極めて平易に佛教の講話を載せつゝあるものなり

▲以上佛教館發兌

◎**禪機**（竹田默雷禪師著）全壹冊 ●價金四拾錢 送料六錢

▲殺活自由は禪の機鋒にして與奪縱橫は禪師の手腕なり活動家必らず一讀再讀せられよ

田淵靜緣師立案
●各宗布教大資林　定價壹圓三十錢　送料八錢

加藤咄堂君立案
●布教大鑑　定價壹圓五拾錢　送料拾貳錢

仝
●說教學講義　定價四拾錢　送料六錢

仝
●說教演說應用修辭學　定價七拾五錢　送料八錢

故水野靈牛師著
●修證義說教講錄　定價壹圓　送料八錢

教導講習院編纂
●講演集　定價貳圓半　送料拾貳錢

加藤咄堂居士著（品切印刷中）
●說教大全　定價壹圓半　送料八錢

鴻盟社出版
●近代見聞善惡業報因緣集　定價四拾五錢　送料四錢

仝　出版
●教誨新潮　定價參拾錢　送料四錢

仝　出版
●譬喩因緣集　定價貳拾錢　送料四錢

仝　出版
●禪學三要　定價參拾錢　送料四錢

大內青巒居士
●佛教之根本思想　定價五十錢　送料六錢

忽滑谷快天師
●參禪道話　定價四十錢　送料六錢

村上專精博士
●誠のしるべ　定價五十錢　送料六錢

加藤咄堂居士
●通俗心經講話　定價參拾錢　送料六錢

原僧運禪師
●禪學早わかり　定價四拾五錢　送料六錢

加藤、境野、園田共著
●佛教講話　定價四拾錢　送料六錢

釋清潭先生著
●寒山詩講義　定價五十五錢　送料八錢

加藤咄堂君
●大乘佛教百話　定價四十錢　送料四錢

仝
●大乘佛教大綱　定價卅五錢　送料四錢

仝
●修道講話　定價四十錢　送料六錢

仝
●佛教要義　定價壹圓卅五錢　送料八錢

石川成章君
●宇宙之默示　定價七拾錢　送料八錢

仝
●自然之妙趣　定價四拾錢　送料六錢

各宗諸大家
●佛教各宗綱要　定價壹圓半　送料拾貳錢

齋藤唯信君著
●佛教學概論　定價壹圓卅錢　送料八錢

山田意齊君著
●三十三所御詠歌畧註　定價拾貳錢　送料四錢

慈雲尊者著
●十善法語　定價廿五錢　送料六錢

伊藤俊道君著（品切再版中）
●釋迦實傳記　定價六拾五錢　送料八錢

境野黃洋君著
●支那佛教史綱　定價壹圓廿錢　送料八錢

大內青巒居士著
●心地觀經報恩品講義　定價七拾錢　送料六錢

四有穆山禪師口述
●西有禪話　定價廿五錢　送料六錢

安藤鐵腸先生
●佛教修身讀本　定價拾參錢　送料貳錢

東光社編
●行誡上人全集　定價貳圓　送料拾貳錢

黑田望月兩君編
●法然上人全集　定價貳圓　送料拾貳錢

中島勸琇師著
●佛教倫理十善講話　定價八拾錢　料送八錢

佛教音樂會
●佛教唱歌集　定價廿五錢　送料四錢

岸上秋嶺師著
●說教惟中策　定價四十五錢　送料六錢

前田文學博士
●修養と研究　定價五拾錢　送料八錢

仝師
●蓮如上人　定價卅八錢　送料六錢

南條博士著
●忘己錄　定價四十錢　送料六錢

仝師
●修養錄　定價四拾錢　送料六錢

前田博士著
●感想錄　定價四十錢　送料六錢

加藤咄堂君著
●心的生活英雄史　定價五拾錢　送料八錢

大内青巒師講述
○碧巖錄講話 和裝（價四圓五拾錢 郵稅貳拾四錢）洋裝（價四圓 稅貳拾四錢）
天桂禪師提唱
○碧巖錄講話 和裝（價貳圓七拾錢 小包料拾八錢）洋裝（價貳圓五拾錢 小包料拾八錢）
南條前田兩博士篇
○佛教聖典 定價六拾五錢 郵稅八錢
忽滑谷快天師著
○禪の妙味 定價金四拾錢 送料金六錢
仝
○禪學講話 定價四拾錢 郵稅六錢
山田孝道師編
○禪門法語集 金壹圓五拾錢 送料拾貳錢

勝峯大徹師述
○禪と長壽法 定價五拾錢 送料六錢
森大狂君編
○禪門法語集 定價貳圓 送料拾貳錢
山田孝道師著
○證道歌講義 代金拾六錢 送料四錢
仝
○信心銘講義 定價金拾錢 送料貳錢
西有禪師
○辨道話講義 代金壹拾錢 送料四錢
仝
○學道用心集提耳錄 代金五拾錢 送料八錢

◉明治二十七年二月創刊（毎週一回水曜日發行）ふりかな附大形十六頁

主筆 高田道見

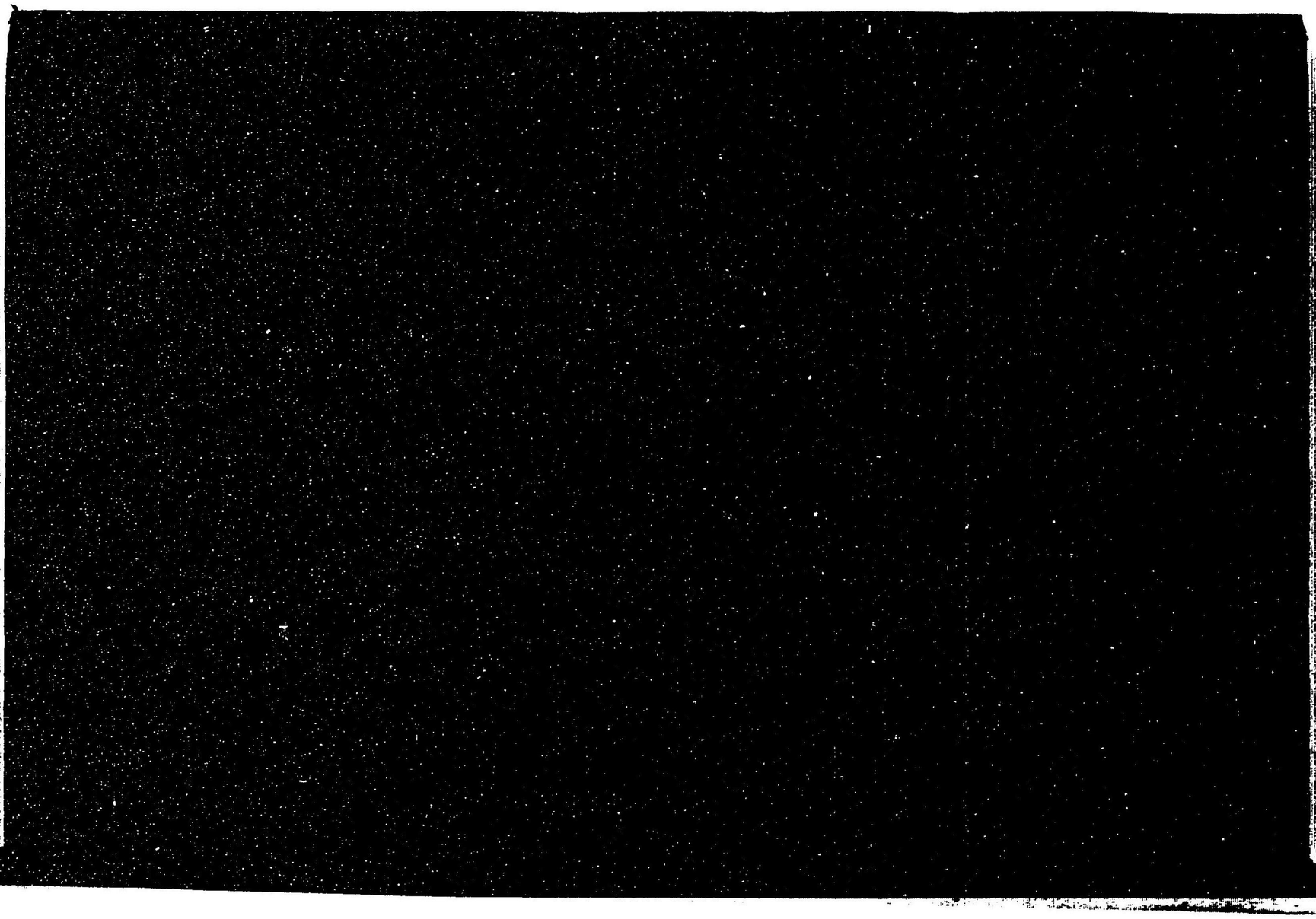
通俗佛教新聞

▲本紙一部定價金參錢▲郵稅五厘▲半ヶ年二十六回分郵稅共九十一錢一ヶ年五十二回分郵稅共壹圓八拾貳錢購讀料前金にて御拂込の事▲爲替宛局芝愛宕町

◉本紙の主義は通佛教なり◉本紙は社主高田道見の獨力にてこれを發行し既往十五年間定期刊行して一回も休刊したることなし◉本紙の主とする所は通佛教の教理を公平に論議報道するに在り◉本紙は日本佛教界の中心となるものに付僧俗の差別なく必讀せらるべき有益の新聞なり◉毎號論說あり、近日連載せる高田師の起信論講話、咄堂居士の宗教問題、觀音靈應記は好讀物也、說教の講錄疑問の解答を掲く◉言論あり漫錄あり◉世出世の雜報あり

◉發行所（東京芝區愛宕町口座二九四六番）佛教新聞社

324
177



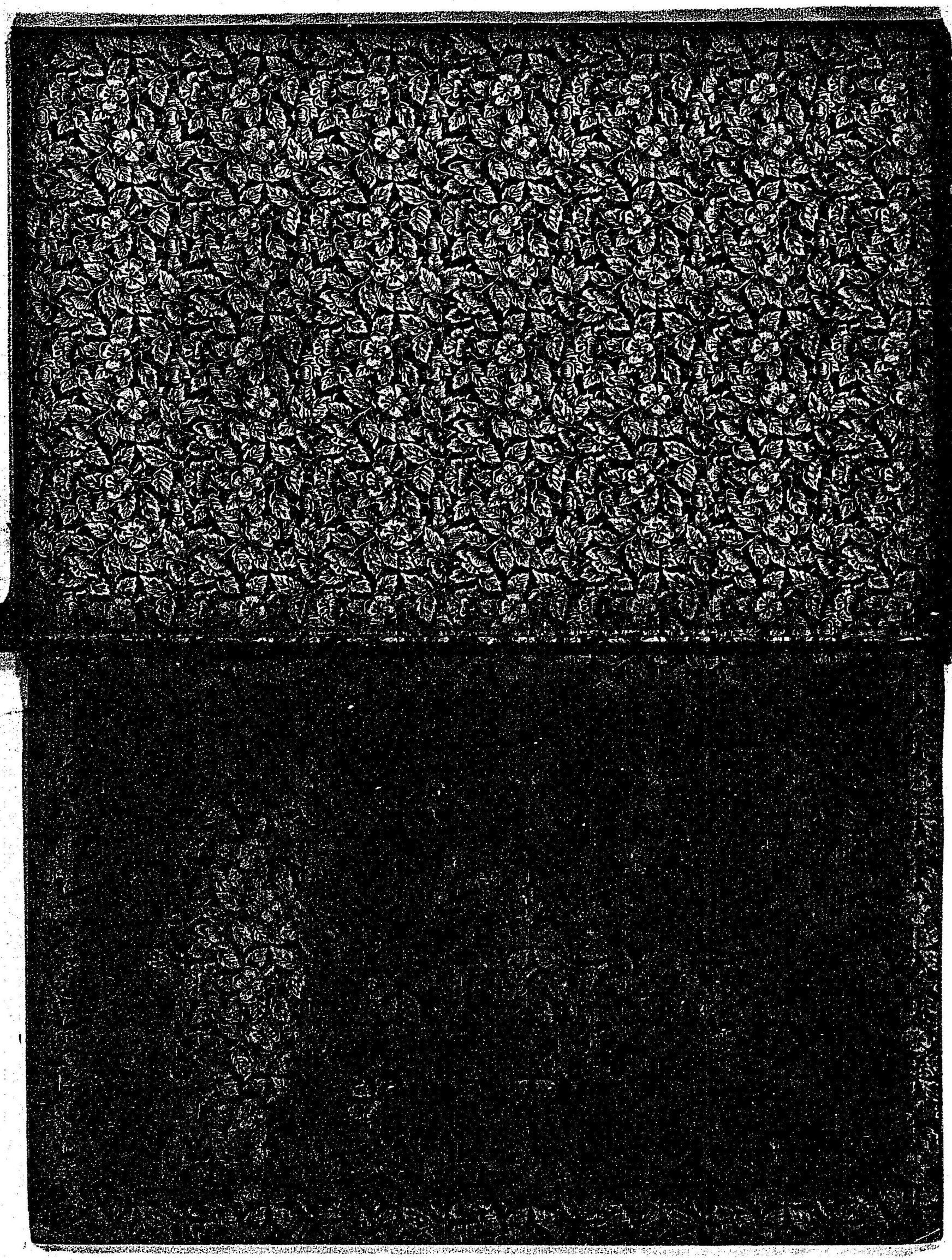
324
77

019884-000-1

324-77

連座説教

松浦　百英／著

M41. 4

ABG-0716